

近代雑誌資料における程度副詞類の使用状況

市村太郎 (国立国語研究所コーパス開発センター) †

The Usage of Degree Adverbs in the Magazine Material of Modern Japanese

Taro Ichimura (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

1. はじめに

本研究では、国立国語研究所によって構築された『明六雑誌コーパス』(2012)・『太陽コーパス』(2005)を対象とし、主に程度副詞類の数量的な状況について分析する。

従来近代語における程度副詞に関する研究は、語史研究においても、各時代の計量的な調査においても、基本的には口語における使用状況を対象として進められてきた。また、中尾(2003)の『太陽』を対象とした研究などのように、文語・口語については区別されずに扱われたものもある。

一方で、当然文語文においても程度副詞は使用されるのであるが、こちらの研究は口語文での使用状況に比べてほとんどなされておらず、口語文での使用とどのように関係するのかはもちろん、何が文語的な副詞であるのかですらも、明確にはされてこなかった。近年副詞の語史研究が盛んに進められており、個々の研究においては、「口語的」という言及がなされることがしばしばあるが、基本的には「会話文で多く用いられる」などの尺度から、総合的に判断されているものとみられる。

そこで本研究では、口語文とともに文語文を多く含む近代雑誌類を資料として、文語記事・口語記事それぞれにおける程度副詞類の使用状況を、数量的な面から明らかにしたい。また、当該資料の範囲での注目すべき語の用法等についても検討する。

2. 本研究における調査対象と方法

調査対象となる『明六雑誌コーパス』・『太陽コーパス』は、記事ごとにXMLタグによって口語・文語の区別がなされており、本研究にはこの情報に基づいて調査を行った。

近代雑誌コーパスを利用した特定の語彙の文語・口語別の計量分析には、注目すべきものとして近藤(2013)がある。本研究においても、数値の指標等おおむねこれに倣い、それぞれの語の単純な出現数粗頻度、出現記事数を集計し、分析対象とした。なお本来ならば、言語の使用は著者・話者ごとというのが基本的な単位であるが、『太陽コーパス』においては著者不明の記事も多く、そのような記事は排除せざるを得なくなり、データ収集のうえで偏りを生じる原因となりうる。その点「記事数」ならば、同一著者の別記事を別々にカウントすることになるデメリットはあるが、データの漏れはなくなる。そのため、本稿においても著者ベースではなく、記事数ベースでの分析に重きを置いた。

次に対象とする語については、本稿では、程度副詞類の中でも最も種類の多い、後続する状態の「程度の甚だしさ」をあらわすものに限ることとし、松井(1977)などの過去の調査を参考にし、さらに実際『太陽コーパス』等での出現状況を調査し、全期を通じて粗頻度100を超える分量が得られるもの14語を対象とした。なお一定量得られるものとしては、「極僅か」の「ごく」や、古くからの「いと」も見られたが、文字列検索で得られたものを選び分けるのは難しく、また、解析済みデータにおいてもエラーが多いことが見込まれるため、本研究においては対象外とした。

また、用法が多種多様にわたるもの、当該期間において意味・機能の大きく変化しているものは除くこととした。

たとえば、真実性を基に事柄を強調する「まことに」は、程度副詞のように後続の状態

†i.taro@suou.waseda.jp

を強調するだけでなく、「実際に」を意味することもあれば、より構文的に広い範囲を修飾し、肯定的、また応答詞的に用いることもある。たとえば次のようなものは「程度副詞」と同等には扱い難いものであろう。このようなものをいわゆる程度副詞と選り分けることは困難であり、本研究においては除外した。

- (1) 東京九段阪上靖國神社の前に高く雲表を摩して樹てられたる青銅華表は諸大名より献納したる舊式大砲を鑄て造りたる記念物誠に千古に傳ふべきなり (『太陽』1「美術」1895 文語)

また、副詞「とても」は、松井(1977)等では集計対象とされているが、中尾(2005)によれば『太陽』の時期は程度副詞用法を派生した段階であり、また用例も多くは得られない。

その他、否定と呼応することのある「全然」や「あまり」等も含め、「後続の状態の程度の甚だしさを強調する」という単純な程度副詞としての機能以外でも多く使用される語については、用例の分別が時に困難であり、調査として平等を期することができないため、今回は除外した。

このように、「程度の甚だしさを表す語」に限り、さらにそこから一部の語を除外することにより、以下の語を調査対象とすることとした。

- (2) 「いたく」「いちじるしく」「おおいに」「きわめて」「しごく」「ずいぶん」「すこぶる」「たいそう」「だいが」「たいへん」「ひじょうに」「はなはだ」「ひどく」「よほど」

なお用例の収集に際しては、「ひまわり ver. 1.3.1」を用い、形態論情報が付与されている『明六雑誌』については、形態論情報を利用して語を同定し収集した。また、『太陽コーパス』については、原則文字列検索を用い、それぞれの語について考える表記パターンにより網羅的に収集し、目視によって対象外の用例を選り分けた。その際、原則として、「連用修飾しており、後続する状態の程度の甚だしさを表しているもの」のみを集計対象とし、たとえば形容動詞用法の連体形や、名詞述語となっているような場合などは排除した。形容動詞連用形に相当する「〇〇に」や「いちじるしく」は取ったが、「甚だ」の場合は、古くから副詞として「はなはだ」が定着しており、形容詞とは大きく乖離していると考えられるため、「甚だし」に類する例は除外した。

- (3) 森中には高調凄音群猿の叫ぶを聞く、俯して水源未知の利根を見れば、水流混々河幅猶廣く水量甚多し、或は岩に觸れて澎湃白沫を飛ばし、或は瀾となり沈靜深緑を現はす、沼田を發して今日に至り河幅水量共に甚しく減縮せるを覺えず、(『太陽』1「利根水源探検紀行」1895 文語)

また「原則文字列検索を用いた」と述べたが、「甚」が漢字1字・振り仮名なしで「はなはだ」を表す例が多くあるが、これを「甚」のみで抽出し、目視で選り分けるのは困難であり、またエラーが発生する可能性が高まるため、漢字1字・振り仮名なしの「甚」については、「近代文語 Unidic」によって形態論情報の付与された内部作業用データ(2014年1月31日時点)を、誤解析箇所を除いたうえで利用した。

なお引用に関しては、「会話」「心話」については集計対象としたが、その他の文献等からの引用箇所については、付与された情報に基づき、除外することとした。

3. 『明六雑誌』『太陽』における程度副詞類の使用数

2で上げた方針に基づき、表1に各語について、文語・口語および、口語記事中の会話文における使用回数と、出現記事数を、各資料・年代ごとに集計した。

表1 『明六雑誌』『太陽』各期における文体別程度副詞の使用記事数と粗頻度(総頻度順)

			明六 (1874/75)	太陽 1 (1895)	太陽 2 (1901)	太陽 3 (1909)	太陽 4 (1917)	太陽 5 (1925)	計
お お い に	文語	記事数	51	262	143	73	19	2	550
		粗頻度	83	914	841	263	42	2	2145
	口語	記事数	0	15	69	163	139	140	526
		粗頻度	0	42	204	388	483	300	1417
	口語 会話	記事数	0	2	11	14	11	12	50
		粗頻度	0	2	18	23	12	23	78
は な は だ	文語	記事数	51	207	136	79	23	0	496
		粗頻度	73	600	665	320	65	0	1723
	口語	記事数	1	17	75	127	114	103	437
		粗頻度	3	36	190	282	264	196	971
	口語 会話	記事数	0	3	12	9	2	12	38
		粗頻度	0	4	23	12	2	17	58
す こ ぶ る	文語	記事数	29	188	123	61	20	1	422
		粗頻度	40	583	564	192	44	1	1424
	口語	記事数	0	11	49	126	119	100	405
		粗頻度	0	22	108	291	267	217	905
	口語 会話	記事数	0	1	4	7	1	3	16
		粗頻度	0	3	7	11	1	3	25
き わ め て	文語	記事数	21	136	104	52	19	2	334
		粗頻度	30	282	394	133	35	3	877
	口語	記事数	0	8	36	131	114	133	422
		粗頻度	0	10	69	351	311	290	1031
	口語 会話	記事数	0	0	0	9	1	6	16
		粗頻度	0	0	0	21	1	12	34
ひ じ よ う に	文語	記事数	0	39	40	13	5	0	97
		粗頻度	0	59	104	27	7	0	197
	口語	記事数	0	9	45	122	117	153	446
		粗頻度	0	11	107	319	327	409	1173
	口語 会話	記事数	0	0	8	8	7	9	32
		粗頻度	0	0	23	11	13	21	68
ず い ぶ ん	文語	記事数	1	37	16	11	2	0	67
		粗頻度	1	53	25	27	2	0	108
	口語	記事数	0	21	67	108	78	107	381
		粗頻度	0	45	126	207	180	176	734
	口語 会話	記事数	0	2	13	19	13	22	69
		粗頻度	0	3	27	39	41	33	143
よ ほ ど	文語	記事数	1	16	14	6	2	0	39
		粗頻度	1	20	19	9	6	0	55
	口語	記事数	1	13	56	98	73	86	327
		粗頻度	1	28	108	205	132	145	619
	口語 会話	記事数	0	2	14	14	4	9	43
		粗頻度	0	2	19	22	12	11	66

いちじるしく	文語	記事数	0	27	32	9	6	0	74
		粗頻度	0	45	72	17	12	0	146
	口語	記事数	0	3	3	29	41	42	118
		粗頻度	0	3	3	45	90	59	200
	口語 会話	記事数	0	0	0	0	0	0	0
		粗頻度	0	0	0	0	0	0	0
だいぶ	文語	記事数	0	11	1	6	1	0	19
		粗頻度	0	12	1	8	1	0	22
	口語	記事数	0	2	19	49	38	61	169
		粗頻度	0	2	30	80	67	85	264
	口語 会話	記事数	0	1	7	10	8	13	39
		粗頻度	0	1	10	20	10	17	58
たいへん	文語	記事数	0	3	0	1	0	0	4
		粗頻度	0	4	0	2	0	0	6
	口語	記事数	0	4	23	19	24	33	103
		粗頻度	0	10	39	29	45	77	200
	口語 会話	記事数	0	0	10	7	7	11	35
		粗頻度	0	0	12	10	16	46	84
しごく	文語	記事数	0	10	6	6	2	0	24
		粗頻度	0	13	14	7	3	0	37
	口語	記事数	0	4	21	29	13	26	93
		粗頻度	0	6	27	34	13	37	117
	口語 会話	記事数	0	2	2	2	1	3	10
		粗頻度	0	3	2	2	1	3	11
いたく	文語	記事数	1	53	23	4	2	1	84
		粗頻度	1	100	47	4	2	1	155
	口語	記事数	0	1	9	5	4	8	26
		粗頻度	0	1	14	5	4	8	30
	口語 会話	記事数	0	0	1	0	0	0	1
		粗頻度	0	0	1	0	0	0	1
ひどく	文語	記事数	0	4	2	1	0	0	7
		粗頻度	0	5	5	2	0	0	12
	口語	記事数	0	3	6	17	22	31	79
		粗頻度	0	4	10	25	41	46	126
	口語 会話	記事数	0	0	3	5	6	7	21
		粗頻度	0	0	5	11	11	7	34
たいそう	文語	記事数	0	9	1	1	0	0	11
		粗頻度	0	14	1	2	0	0	17
	口語	記事数	0	8	10	14	9	18	59
		粗頻度	0	13	14	21	10	26	84
	口語 会話	記事数	0	2	4	4	4	8	22
		粗頻度	0	2	7	9	4	11	33

※「おおいに」は「大に」表記分類困難のため、「おおきに」「おおいに」を合算した。

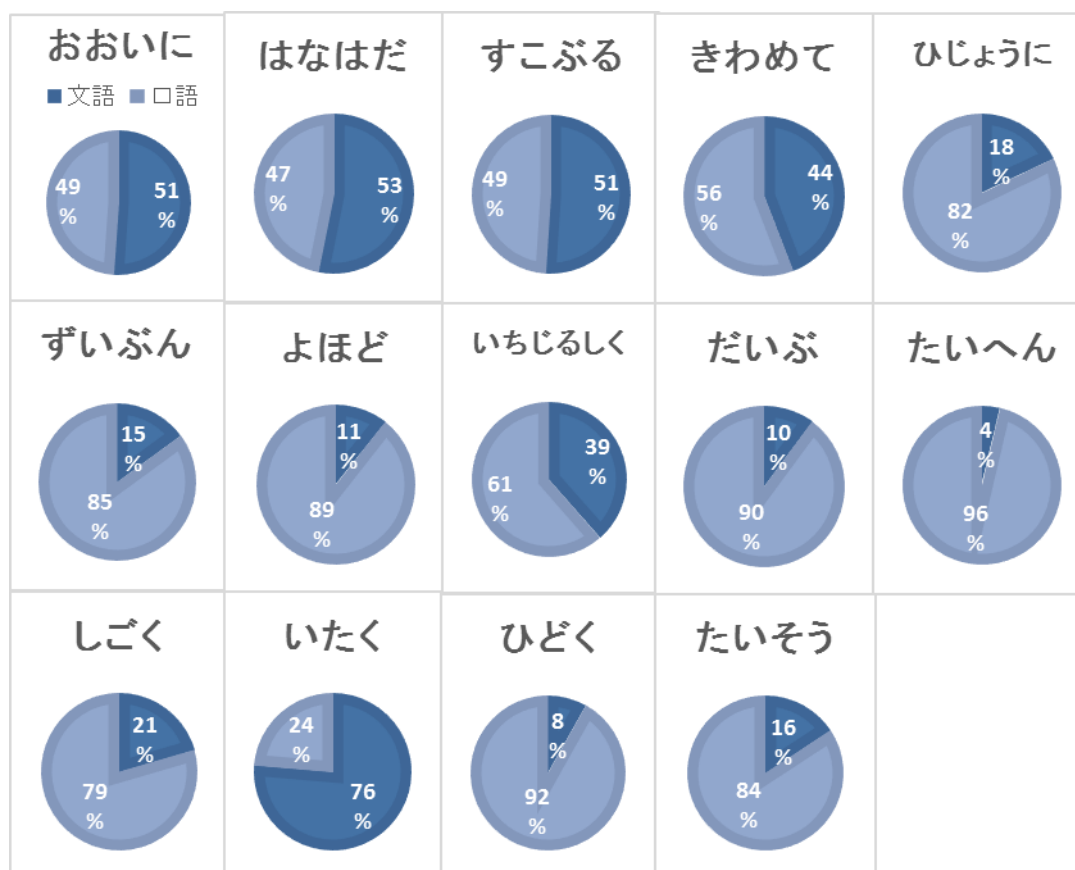
『明六雑誌』・『太陽』では、記事数ベースでは、「おおいに」(1076)が最も多く用いられ、以下「はなはだ」(933)「すこぶる」(827)「きわめて」(756)「ひじょうに」(543)「ずいぶん」(448)「よほど」(366)「いちじるしく」(192)「だいぶ」(188)「たいへん」(107)「しごく」(117)「いたく」(110)「ひどく」(86)「たいそう」(70)の順となった。

この結果は、松井(1977)や趙・祁(2010)による口語文・小説会話文を対象とした調査の結果とは大きく異なり、やはり文語文を含むという文体的な使用状況の差が影響しているとみられる。そこで表1の数値に基づき、次の表2には文語・口語別に、それぞれの出現記事率(口語・文語各出現記事数/口語・文語各全記事数)、表3には各語に就いての出現記事における文語・口語の比率を示す。

表2『明六雑誌』『太陽』所載の文語・口語全記事中の文体別の出現記事率(%)
※総記事数は文語 1765 記事・口語 1781 記事

おおいに	文語	31.2	ずいぶん	文語	3.8	しごく	文語	1.36
	口語	29.5		口語	21.4		口語	5.22
はなはだ	文語	28.1	よほど	文語	2.2	いたく	文語	4.8
	口語	24.5		口語	18.4		口語	1.6
すこぶる	文語	23.9	いちじるしく	文語	4.2	ひどく	文語	0.4
	口語	22.7		口語	6.6		口語	4.4
きわめて	文語	18.9	だいぶ	文語	1.1	たいそう	文語	0.62
	口語	23.7		口語	9.5		口語	3.3
ひじょうに	文語	5.5	たいへん	文語	0.23			
	口語	25		口語	5.8			

表3 各語の用例出現記事の文語・口語の比率



まず表2によると、文語記事において多く用いられる程度副詞は、「おおいに」・「はなはだ」・「きわめて」・「すこぶる」であり、口語記事において多く用いられる語は、「おおきに」・「ひじょうに」・「はなはだ」・「きわめて」・「すこぶる」・「ずいぶん」・「よほど」であった。「おおいに」・「はなはだ」・「きわめて」・「すこぶる」は文語・口語両方に用いられ、口語にはさらに「ひじょうに」「ずいぶん」「よほど」が加わるという状況であった。

また、出現記事の文体面での偏りを見る(表3)と、「いたく」「はなはだ」「おおいに」「すこぶる」「きわめて」「いちじるしく」は比較的文語記事で使われるケースが多い。このことから、「はなはだ」「おおいに」「すこぶる」「きわめて」が文語記事において頻繁に用いられ、「いたく」「いちじるしく」も、全体的な頻度としてはさほど多くはないが、語としては文語記事で使われる割合が高い語と言える。

4. 文語での使用が多い副詞について

4. 1 各語の使用状況と近世語との関係

本調査の結果を松井(1977)や趙・祁(2010)の調査に照らし合わせると、「おおいに」・「はなはだ」等、文語で多くみられる語であっても、口語文や小説会話文で多く用いられているものがあることがわかる。表2の結果ともあわせ、程度副詞類においては、文語で多用されるからといって、口語文で使われないというような制約はないと言える。「おおいに」「はなはだ」は、文語・口語共通の副詞として、また比較的会話文には分量が少ない「すこぶる」「きわめて」などは、文語・口語共通の書き言葉として広く用いられたと考えられる。

さて、前項において、「はなはだ」「おおいに」「すこぶる」「きわめて」「いたく」「いちじるしく」が、比較的「文語的色合いを帯びる語」と言えることを確認した。これらの語の大部分は、近代以前の資料においても文語的な文章での用例がみられるものである。

(4)又、唐書をよみて見るに、郭元振すがたはなはだうつくし。(『ひとりね』)

(5)これは決戦に比し候に大に劣り候やと被存候。(『白石先生手翰』)

(6)山ノ左右ノスソ長ク、形チ頗ル富士ニ似タリ。(『孔雀樓筆記』)

(7)此朝臣は(…中略…)父にも祖にも超て老中の職ともなりたり。されど、きはめて意地わるき根性ありて、(『折たく柴の記』)

(8)「蘭東事始」と題して、即函丈に進呈す。師、是を披閲し給ひ、「翁が素情、是にて償ひぬ」と、いたく喜ばせ給ひたり。(『蘭東事始』)

「はなはだ」「おおいに」「きわめて」「いたく」については、原(1970)において『今昔物語集』の程度副詞として挙げられたものでもあり、古くから見られるものである。また、「すこぶる」については、築島(1963)において漢文訓読語として挙げられており、途中意味的変遷を経たものの、(6)のように近世においては程度副詞として用いられている。

このように、これらの語は近世文語における程度副詞類の使用を受け継いだものと言える。また「いたく」以外は『明六雑誌』にも例が多く見え、その一方で「よほど」「たいそう」など近世口語文で用いられることの多かった他の語は殆どみられないことから、程度副詞に限れば、『明六雑誌』の文章は近世文語文を踏襲しているといえるであろう。

ただし「いたく」のみは『明六雑誌』ではわずか1例のみであった。太陽初期の文語文においては比較的多く用いられていたが、文語記事内での出現率は1901から1909では4.8%から1.5%と急落し、また口語文でも定着せず、衰退傾向にあると考えられる。

これら旧来の語に対して、「いちじるしく」は、本調査では近世期の文献には程度副詞化した例を得られておらず、また『和英語林集成』においても、程度副詞用法の記載はなく、『明六雑誌』にも使用は見られない。また、会話文には用例がみられず、松井(1977)の調査でも32位と下位であった。明治以前の具体的な使用状況は現時点では不明と言わざるを得ないが、この時期の書き言葉において発達しつつある述べ方と考えられる。

4. 2 各語の使い分けと「いちじるしく」の意味

では各語はどのように使い分けられ、また「いちじるしく」はどのような特徴があった

のだろうか。

まず文語・口語両用の副詞として多用されている「大いに」については、古い語形「おおきに」に関する、『今昔物語集』等を対象とした原(1971)によれば「形容詞・形容動詞には係らず専ら同時に修飾する」特徴があるという。

この傾向については、(12)のような例外はあるが、10例に満たない程度であり、近代雑誌においても動詞や動きを表す語に係るといえるのは同傾向であった。

(9)昔希臘の初めて興るや其民強健剛毅にして國を愛するの心深し(…中略…)然るに民風此時より破壊し驕奢淫佚輕薄狡猾の風大に行はれ國初の強健剛毅の氣悉く消磨し遂に羅馬の民に其國を奪はる(『明六雑誌』3「陳言一則」1874 文語)

(10)桂公も大いに意を強うし、翌日早速澁澤氏以下當代の實業家を招待して、同じく諒解を求められたのだといふ。(『太陽』9「時局に面して安田善次郎翁を想ふ」1925 口語)

(11)『僕は其氣で大いに勉強しなければならん(『太陽』11 喜劇「無能病」1909 口語会話)

(12)大變お手和らかで、大いに受けが好かつた。(『太陽』1「漱石先生と門下」1917 口語)では、多くが形容詞にかかる「すこぶる」と「はなはだ」は何が異なるだろうか。

「すこぶる」は漢文訓読語由来の語で、プラス評価であろうがマイナス評価であろうが、肯定的・積極的に言い立てるような強調の意を表すとみられる。現代ではそして「*頗る少ない」では用いないとされ、「普通の程度をはるかに超えている」(『類語例解辞典』)とされる。近代雑誌資料においては、「少ない」ことを修飾する例はあるのだが、わずかであり、その一方で中尾(2003)に指摘されるように、「多い」「盛ん」に係る例が目立つ。

(13)我邦開港以來金銀の外出頗る多し近年最も甚だし大抵其源六なり(『明六雑誌』23 正金外出歎息録(貨幣四録の二)1874 文語)

(14)概して其運賃の高率なるのみならず、列車の運轉度數亦頗る僅少であつて面白くない。(『太陽』13「清国鐵道の現況」1909 口語)

一方「はなはだ」は、否定的であっても後続事態を淡々と強める文脈でも用いられる。また現代語と異なり、「はなはだよし」などプラスの文脈でも用いられる。ただ、「微」や「少」の類で多く用いられる点や、(16)のような消極的評価となる否定文、また(17)のように「あまり」のような意でも用いられる点は、「すこぶる」とは傾向が異なる。

(15)然らずんば全國幾多の商業學校の勃興するも、其與ふる所の教育の效果、蓋し甚だ微々たるものあらん。(『太陽』14「商業世界」1901 文語)

(16)作家が他の作家の畫に妄評を下したり、人身攻撃を加へたりするのは甚だよくないけれど、自己の主張を正々堂々と述べるに何の憚る所があらう。(『太陽』13「四季花鳥」1917 口語)

(17)若し國宗に異なる宗教を信ずる人民其數甚だ多からず然も政府之を國內に許し置くを不可と爲す時は其異宗人民各其所有の土地を賣却し家族と共に其國を去り又總て其家産を擧去するの通義を有すべし(『明六雑誌』6「ワツテル」1874 森有礼 文語)

中尾(2003)は「少ない」「稀」等に修飾する点に着目し、「消極的な評価」(p.136)を表すとした。このような特徴が長じて現代語では「マイナス寄り」(飛田・浅田、1994)「自分にとってマイナス」(『類語例解辞典』)というニュアンスにつながるのだろう。

また、会話文に見られる「はなはだ失礼」については「すこぶる」には例が見られない。

(18)いや、これはお待たせ致いたしました、甚失禮を致いたしました。(『太陽』喜劇「まぜっかへし」1909 口語会話)

ではこれらの語の中で、「いちじるしく」は何を特徴として存在しえたのであろうか。目立つ点としては次のように比較や変化を表す構文に用いられることが挙げられる。

(19)實際發病の初期に於て貯藏物質が未だ發芽せざるものに比して著しく少なきこと、實驗の證明する所なり。(『太陽』13「農業世界」1901 文語)

(20)但だ江左に至りて、其の法の著しく發達せしや疑を要せざるべきか。(『太陽』3「字音の標準」1895 文語)

また、表現としては比較や変化の構文でなくても、次のように文脈的に比較や変化を背

景としている文で用いられている。

(21) 近來青年文人の間に世を厭ふの思想著しく萌え出で爲に自殺を遂ぐるものすらあるは洵に慨はしき事共なり (『太陽』7「文学」1895 文語)

(22) 次に事業經營上の成績の點から見ると遺憾ながら日本はヨーロッパに比較して非常に劣つて居る。製品も粗悪であるし、原價が著しく高い。(『太陽』7「事業經營上より比較したる黄白兩人種の優劣」1925 口語)

一方、「*いちじるしく嬉しくなった」などのように、自らの感情等は表さない。

つまり書き言葉において、何らかの比較を背景として客観的・観察的に(渡辺、2002に於ける「ひとごと」として)、後接する状態について「程度が甚だしい」「顕著である」ことを述べるのが、近代における程度副詞「いちじるしく」の特徴であると見られる。

5. 口語的な副詞の使用状況

5. 1 口語会話文での使用状況

3では「ひじょうに」「ずいぶん」「よほど」「だいぶ」「たいへん」「しごく」「ひどく」「たいそう」が比較的口語的な語であることが分かったが、口語的性格をより詳細に検討するため、各語の全用例中、口語会話文での用例がどの程度占めるかを次の表4に示した。

表4 各語の全用例における口語会話出現率 (%)

たいへん	32.7	よほど	11.7	きわめて	2.1
たいそう	31.4	しごく	8.5	すこぶる	1.9
ひどく	24.4	ひじょうに	5.9	いたく	0.9
だいぶ	20.7	おおいに	4.6	いちじるしく	0
ずいぶん	15.4	はなはだ	4.1		

「たいへん」「たいそう」「ひどく」「だいぶ」の4語は20%を超え、とりわけ「たいそう」と「たいへん」は、文語記事における用例もすべて会話文であり、特に話し言葉としての性質が強いものと言えよう。

一方、「ひじょうに」や「しごく」については、口語会話文での用例は少ない。特に「ひじょうに」は、表2を見ると『明六雑誌』では用いられないが、『太陽』1895年・1901年では文語文で多く用いられていることが目を引く。その後口語文でも、会話文では大きな動きが見られないものの、地の文において大きく数を伸ばしている。

このように、口語文で使用される語の中でも、「たいへん」「たいそう」など話し言葉寄りのものと、「ひじょうに」など主に書き言葉で使用されたものがあつたことがわかる。

5. 2 「ひじょうに」と「たいへん」をめぐって

表2を経年的に見ると、近代雑誌資料において口語的な程度副詞の中で特に使用が拡大しているとみられるものに「ひじょうに」と「たいへん」がある。「ひじょうに」は『明六雑誌』では例が見られないものの、文語文・口語文両面で用いられ、『太陽』においては1909年以降書き言葉として使用が拡大している。一方「たいへん」は、口語記事の特に会話文において1925年の『太陽』で粗頻度第1位となっている。

この2語が伸長した契機は何だったのだろうか。まず両語の意味・機能面を確認する。

「ひじょうに」については、中尾(2003)が、下記の点を特色として挙げている。

- ①「変化動詞にかかることが多く、客観性や評価性のある表現となる」「客観性を表現する語で二人称、三人称の感情の程度を表現する語」
- ②「形容詞・形容動詞の分析によれば『高い』や『大』などにみるように対象とする事柄が、『非常に』は具象的な事柄が多い」
- ③「より客観性のある、変化を表す語や評価のよいものに関する語が多くみられた」(p.137 箇条書きは筆者)

しかしながら、実際の用例を観察すると、これらの分析には疑問が生じる。

まず「二人称、三人称の感情の程度を表現する」とされるが、たとえば「ひじょうに」の「喜ぶ」の例は口語文での例であり、文語文では「はなはだ」や「いたく」が用いられていて、「非常に」は用いられていない。文語・口語で分担している可能性があり、中尾の挙げた性質が「非常に」の他の副詞類と区別すべき本質的なものと断言するのは難しい。

また、「二人称・三人称」「客観性」という点についても次の例を見ると、疑問である。

(23)私は此事を曾て或る報告書で見た事もあるが、近頃ノースロツプ氏より直接概畧の話を聞いて非常に感じた事である、(『太陽』7「樹栽日に就て」1895 口語)

(24)大層親切に世話をして呉れますので、私は非常に喜んで居るんです(『太陽』11 喜劇「無能病」1909 口語会話)

(25)之を考へると私は非常に心細い。(『太陽』13「心頭雑草」1917 口語)

上の例ではいずれも「私は」が明示され、自らの感情や感覚について述べている。「二人称・三人称の」「客観的」なものではなく、「一人称」の「主観的」な文脈でも用いるということになる。この差は、渡辺(2002)の「わがこと・ひとごと」の別にあたるもので、程度副詞類を分類する上で重要な観点であって、無視できない。

また「変化」構文にも表れることを特色としているが、この点については、むしろ動詞修飾を主とする「大いに」や比較を背景とする「いちじるしく」、話し言葉では「だいぶ」「ずいぶん」に顕著にみられる傾向である。中尾(2003)自身が「非常に」のかかり先として「高い」「大きい」を挙げているように、形容詞等の静的な状態性述語に修飾するのが基本であって、「非常に」のみに目立つ特徴とまではいえないように思われる。

また中尾(2003)は「積極的な評価を表現する」(p.136)とする。しかしながら、確かに「はなはだ」と比較すればその傾向はあるだろうが、「少」「低」などは「非常に」においても少なからずみられ、「はなはだ」以外の語と一線を画するほどの特徴とは言えない。

結局のところ、「非常に」は、形容詞・動詞を修飾し、「わがこと」にも使い得る、つまり程度副詞として、意味・機能的な面で比較的制限の少ない語であったとするのが、妥当と考える。だからこそ多くの類語がある中で伸長する契機があったと考えられるのである。

また「たいへん」についても、市村(2012)で挙げたように、「わがこと」についても表し得、意味・用法上制限の少ない語であったと考えられる。(26)のように「わがこと」を表す例もあれば、(27)のように「そうだ」と共起する客観的・観察的な例もあり、また(28)のように変化を表し、「少」を修飾する例もある。

(26)意味は言ひツこなし、ね、私は今大變困つてるんですから、虐待るのはよして頂戴よ、(『太陽』4「銅山王」1909 口語会話)

(27)急いで病院へ駆け着けて見ると、病人の枕頭には、前夜の通りに叔母と父親とがしょんぼり番をして居た。朝の間は大變心持が好き相に見えたが、午後から何うも容態が好くない。(『太陽』1「反魂香」1917 口語)

(28)印象は大體いつもと同様だ。たゞ例年より左傾的な繪が大變少くなつたやうな気がする。(『太陽』12「二科印象批評」1925 口語)

このように「ひじょうに」も「たいへん」も程度副詞としては制限の少ない語であったと言え、その点が近代～現代における伸長につながったと考えられる。

さて、この2語は、『日本国語大辞典』第二版等を見ると、両語とも明治期に程度副詞用法を派生したとみられるが、では同時期に発生した両語の「書き言葉の性質」「話し言葉の性質」に明確に分かれることになった背景にはどのような事情があったのだろうか。

この点に関しては、程度副詞用法を派生する以前の状況が関わっているとみられる。

漢語「ひじょう」は、近世期には「たいへんだ」ほど口語的な用例は見られず、文語的な文の中で用いられている例が見られる。また明六雑誌においても、「非常の」が見られる。

(29)此全澤、博學の人なりしが、天性奇人にて、萬づ其好む所常人と異なりしにより、其良澤を教育せし所亦非常なりしとなり。(『蘭東事始』)

(30)かくの如き非常の人は豈王法の刑罰に由てその道の行なはるを防ぎ遏むるヲを得べけ

んや(『明六雑誌』37 賞罰毀誉論 1875 文語)

一方「たいへん」は、程度副詞用法を派生する前の形容動詞の用法がすでに口語的な語であり、その前身となる「大きな変事」を意味する名詞用法以外では、より話し言葉への偏りが大きく、江戸の戯作等話し言葉を反映する資料において用いられている。(32)は程度副詞の萌芽的例と言えるが、これも人情本の会話文の例である。

(31)北八「こいつは大變〜 (『東海道中膝栗毛』)

(32)丹「ヲヤ〜大變につもつたぜ、こりやアおみねへ (『春色辰巳園』)

「たいへん」と「非常に」は、程度副詞用法を派生する前の段階において既に文体的に差があるとみられ、そのような状況が、『太陽』での「大變」が話し言葉的で「非常に」が書き言葉的であるという差に反映しているのであると考えられる。

飛田・浅田(1994)によれば、現代における「非常に」は「やや硬い文章語」であり、「たいへん」は「慨嘆・驚き・感動・丁重さなどさまざまな暗示を伴う」(p.443)という。

近代雑誌における両語の伸長過程の違いは、このような現代語における両語のもつニュアンス違いに通じるのである。

文 献

- 市村太郎(2012)「副詞「たいそう」の変遷—近代語を中心に—」『国文学研究』167
- 近藤明日子(2013)「近代雑誌総合記事に出現する一人称代名詞の分析—単語情報付『太陽コーパス』を用いて」近代語学会編『近代語研究』17、pp.133-154、武蔵野書院
- 田中牧郎(2005)「言語資料としての雑誌『太陽』の考察と『太陽コーパス』の設計」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』、pp.1-48、博文館新社
- 趙宏・祁福鼎(2010)「近代語の会話文における程度副詞の使用状況をめぐって—『高い程度を表す』副詞を中心に—」『明治大学日本文学』35
- 築島裕(1963)『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会
- 中尾比早子(2003)「明治・大正期における程度副詞「非常に」について」田島毓堂・丹羽一彌編『名古屋・ことばのつどい 言語科学論集』、pp.127-138、名古屋大学大学院文学研究科
- (2005)「副詞「とても」について—陳述副詞から程度副詞への変遷—」国立国語研究所編『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』、pp.213-226、博文館新社
- 原栄一(1970)「程度副詞おほきに小考」『金沢大学教養部論集人文科学篇』8
- 飛田良文・浅田秀子(1994)『現代副詞用法辞典』東京堂出版
- 松井栄一(1977)「近代口語文における程度副詞の消長—程度の甚だしさを表す場合—」
- 松村明教授還暦記念会編『松村明教授還暦記念 国語学と国語史』、pp.737-758、明治書院
- 渡辺 実(2002)『国語意味論』塙書房

※辞書・資料類(資料類の引用に際しては振り仮名を省略するなど表記を一部改めた。)

『日本国語大辞典』第二版 小学館 2001

『使い方のわかる類語例解辞典』小学館 1994

中村幸彦他『近世随想集』日本古典文学大系 岩波書店 1965

松村明他校注『新井白石』日本思想大系 岩波書店 1975

小高敏郎他校注『戴恩記 折たく柴の記 蘭東事始』日本古典文学大系 岩波書店 1964

麻生磯次校注『東海道中膝栗毛』日本古典文学大系 岩波書店 1958

中村幸彦校注『春色梅兒誉美』日本古典文学大系 岩波書店 1962

関連 URL

国立国語研究所 近代語のコーパス http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/cmj/